

### 3度目の緊急事態宣言

## 明日生きていくお金や食べ物がない子どもたち

今井 紀明

パソコンに向かう。僕は今、自宅の和室に座って毎日のように子どもたちの声を聞いている。僕が理事を務める認定NPO法人D×P（ディーピー）は、ユキサキチャットというLINE相談サービスを運営している。4400人を超える全国の高校生、若年層の登録があり、不登校や虐待、中退、困窮状態にあるという相談を毎日、毎日みている。「助けてください」という声が届く。僕は、ひとりひとりと向き合い続けている。

2020年度の食料支援の数は5000食を超えて、



現金給付は342万円になった。「ガスや電気が止められました」「家賃を滞納しています」「親から

殴られて」「死のうと思っています」という厳しい状況にいる相談者からの相談がこの1年間で増えた。スタッフと毎日2回ほど会議を行ない、ひとりひとりの支援内容や方向性を決めていく。相談はすぐに解決する場合もあれば、数ヶ月、1年単位でかかることもある。相談者との相性などを考えて担当の相談員を決め、チャットと電話、zoomなどを駆使して信頼関係をつくりながら関わっていく。必要な場合は自治体の生活保護担当をしている福祉課や子育て支援、児童相談所にも連絡をし、企業や他のNPOとも連携して相談者の頼れる先をつくっている。

ある子は「天井を見上げて」と言った。動く気力がない、食べていない、コロナの影響で仕事を失い、これまでアルバイトもがんばってきたが、所持金がないという。僕はその地域に偶然いたので、ちょっとした機会でも会えませんか、と聞くと駅まで来てくれた。少し話すと、

「人に話すこと、本当にしていなかったんです」

「そっか、誰にも相談していなかったんだ」

「はい、友達とかに経済的なことはやっぱり相談しづらくて」

「そうだね、そういえばお金、心配しているんだけど、あといくら残っているの？」

「所持金は300円とちよつとです。家賃も滞納していて」

「そうなんだ、うちの方でもできる限り支援できるように動くね、生活保護などの申請も手伝うね。ご飯も食べていないって聞いたので、これ渡すね」

僕は1万円を出し、渡す。

「ありがとうございます」

「スタッフと面談して、申請もしていこう」

そう言っって、僕は見送る。結果的に、スタッフはその子と連絡を取り続けて地域のソーシャルワーカーの協力のもと、生活保護を受けることができた。

### 孤立する子どもたち

オンライン上で僕らはいつもやりとりしている。顔が見えない、文字しかみえない、

る。

## 「所持金があと3000円」

一見無機質かもしれないやりとり。しかし、僕らは顔を見せない面談をしたり、時には対面で会ったりしながら全国の若年層と関わり続けている。少しでも気持ちが届けばいいと思い、食料支援をするときの箱には毎回ポストカードを入れている。相談員が手書きでメッセージを書いて送る。

食料支援や現金給付を必要とする若年層に共通するのは、何らかの理由で親に頼れないということだ。例えば、親がそもそもいない、親から虐待を受けて施設などで暮らしているなど。また、ひとり親家庭などで経済的に頼りづらかったり、親と関係性が悪く家を出て一人で暮らしていたりする。親に頼れずに暮らす相談者の多くは、緊急事態宣言などの影響でアルバイトの就業時間が減ったり休業補償が出なかったり、急に仕事をやめさせられたりして困窮状態に陥ってしまったという。アルバイトで働き生計をたてる若年層は、1回目の緊急事態宣言から相談がきていたが、いまは国立大学の学生や新社会人など、今年の春から新生活を始めたという若年層からも相談が届くようになった。なかには児童擁護施設や自立援助ホームを退所したばかりだという10代もいる。奨学金など借りながらがんばってきたが、コロナ禍でバイトもできず貯蓄が減り困窮状態に陥って

想像する。あと、3000円しかなくてお米も少ししか残っていない。ひとりひとり、ぎりぎりまで相談せずにきたのだろう。仕事も自分で見つけようとしてきたことは話を聞いているとわかる。しかし、緊急事態宣言で急に仕事がなくなった後に、貯蓄がない10代がどうやって自力でこの状況を切り抜けられるだろうか。親に頼れない大学生や専門学生が、勉強もし、奨学金を返すプレッシャーも感じながら、アルバイトがみつかりづらいコロナ禍の下で安心して暮らせるだろうか。この状況を若者ひとりの力で切り抜けさせることはあまりにも酷であるし、自己責任といって切り捨ててはいけない。

しかし、国からの支援は世帯支援が中心だ。未成年には直接届かないことがある。20歳以上の場合には生活を支えるために生活保護があるが、それを使いたくないという人もいる。また給

付制度は少なく、申請もひとりでは難しい。貸付制度もあるが、見通しがつかない状況だと返済の不安がついて回るだろう。そもそも支援制度の情報を知らないこともある。国側も動くようになっているが、公助は足りていないし、公助は自ら困っている人のところにやってはこない。

だから、僕はユキサキチャットで相談に乗りながら現金給付を数カ月間に渡って支援する。直接、困っている若年層に提供し、安心できる環境をつくる。その後、生活を続けられるように就職などを目指して

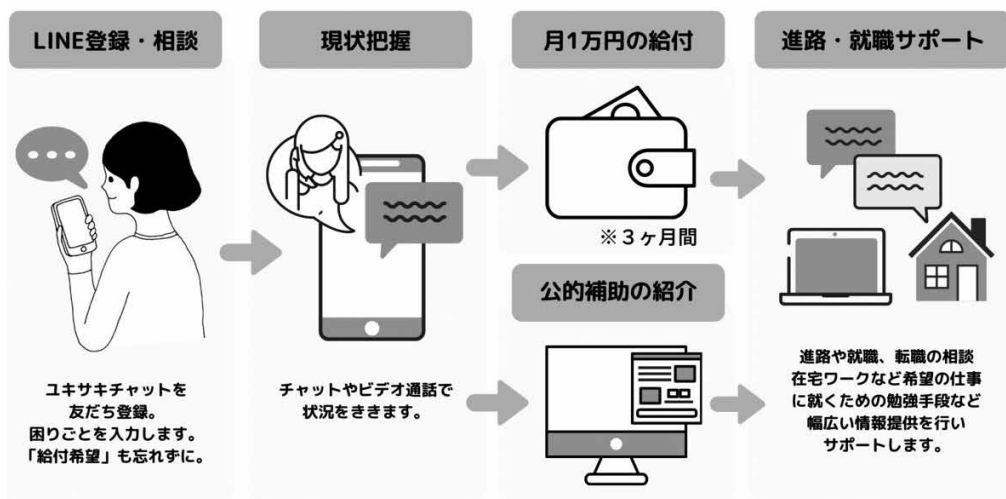


食べ物のない子どもたちへの食料支援

サポートしていく。

## ひとりひとりの若者が希望を持てる社会へ

僕は創業以来、10年かけて国や企業がサ



ユキサキチャットはこのような支援しています

ポートできていない子どもたちの支援をスタッフや寄付者の方、ボランティアの方々と作ってきた。コロナ禍では、全国の子どもたちの対応ができる体制を整えた。2020年度は全体で約8600万円の予算のうち、6800万円は寄付で事業を行なってきた。8割は個人寄付だ。寄付型のNPOだったからこそ、コロナ禍の状況下でもすばやく対応して子どもたちと日々、接することができている。これが行政の委託事業だったら、定められた契約内容に基づくため、緊急対応をスピーディーに行なうのが難しかっただろう。

寄付の力は社会をつくる資本になることだ。社会のモデルとなる事業を作り、そして国や企業ができない支援をつくることができる。僕が代表を務める認定NPO法人D×Pではオンライン上で困っている10代と出会うアウトリーチができています。日本はオンライン上のセーフティネットが未整備であり、相談先もまだ少ない。それを変えていく必要性があるし、僕たちは2000名近い個人寄付者さんとともにそのモデルを作り続けている。

国ができれば民間で、やりとげていく。D×Pのビジョンである「ひとりひとりの若者が自分の未来に希望を持てる社会」は単なる目標ではなく、実現していく

### 認定NPO法人D×P

<https://www.dreampossibility.com/supporter/>

電話：06-7222-3001

### ★子どもたちへの食料支援、現金給付の活動を支援してください。

- ・銀行名：ゆうちょ銀行
- ・記号：009104
- ・番号：332445
- ・口座名：特定非営利活動法人 D×P  
(他銀行からの場合：〇九九店 当座 0332445)

(いまいのりあき／認定NPO法人D×P理事長)

ことだ。ひとりひとりに対して未来に希望をつくりたい。その思いで僕は仕事をしている。

今日もユキサキチャットに連絡がくる。「しんどい」と。この状況、ひとりよくがんばっているし、すごいよ、と声をかける。画面上のやりとりかもしれないが、それは始まりだ。人と人との温かみがそこにはあるはず。冷たくない、頼れる存在や支援を僕はつくっていく、今日も明日も。